
野良猫三人今日も行く

灰原 佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野良猫三人今日も行く

【Nコード】

N4970K

【作者名】

灰原 佑

【あらすじ】

猫の視点で送るほのぼのコメディー。

俺は孤高の流浪猫。山を越え、川を渡り、民家の床下で鼠を貪る毎日。どんなに寒く厳しい冬でも強靱な肉体と自慢の紅い毛で耐え凌いできた。既に肉球は石のように硬く、左目にはある町を我が物顔で闊歩していた土佐犬との一騎打ちで負った切り傷が刻まれていた。それら全てを総合して見れば、一目瞭然だろう。俺には

《凄味》がある!!!

人間の言葉で言えば・・・そう!! “かりすま”とか言ったな・・・。傍から見ればただの荒くれものだが案外俺は博識なんだぜ。そんな俺の“滲み出る”魅力に惹かれた奴らが最近付きまとして鬱陶しいぜまったくよお。

「あにきいいいい!!!見てくたせえ。鯉節一パツク盗つてきやしたぜつ!!!」

「うるせえ!!!俺が毛繕いしてるときは話しかけるなって言ってるんだろがあ!!!おええっ!?!毛玉がつ!!!」

「うつつ すまねえあにき。」

俺をあにきと呼ぶこいつは『銀二』。この町ではそう呼ばれているらしい。灰色とクロの斑模様まだらが特徴の気立てのいい奴だ。俺の言うことも良く聞いてくれるし、中々先輩受けもいい。ああ、そうだ。ついでに言つと俺はこの町では『あか』って呼ばれてるぜ。俺には必要ねえがな。

「あれ？あにきい。茶子のやつまだ帰って来てねえんですかい？」

「・・・ふん。どっかで昼寝でもしてんだろ。それより昼飯の時間だ。今回の標的は長谷川宅だ。いくぞ！！」

「へいつ！！つて、あれ！？鯉節は？」

「馬鹿言つてんじゃねえ！！あんなもん餓鬼がしゃぶるもんだ！！
！男だったら煮干だろつがああ！！」

「・・・さ、さすがつすあにき！」

俺と銀二は公道を我がもの顔で歩き、白線に自分達の縄張りだと誇示するように爪を研ぎ己の跡を残す。たまに騒音を吐き散らす流れ者が突進してくるが俺の一睨みで脇に避けて行きやがる。ふん！最近は軟弱な奴が増えたもんだ。

「そうだろつ銀二！」

「そうツスねあにき！！」

雄々しく歩いてきた二匹だが銀二の腹の虫が限界を迎えていたようだ。後ろから弱弱しい声で音を上げて来る。

「あにきい・・・」

「ああん。つたく、それぐらい我慢しろよ銀時。」

「ううう。あの鰹節、少しでいいから食っておけばよかったあああ
がつくりと頭を下げてトボトボと付いてくる。それを見たあかは仕
方ない奴だとばかりに息を吐き。」

「仕方ねえな。ちょっと待ってる。」

「あにき?。」

疑問を浮かべた顔であかが何をするのか向かった先へ視線を向ける
と、ちょうどデパートから買い物袋を手に提げた中年のおばさんが
出てきた。それを待っていたかのように前方へ躍り出るあか。

「あは?。」

「ふつ。俺の美しくも愛らしい体の前で籠絡しない奴はいないのさ
あかはおもむろに寝転がり、おばさんに首だけ起こしてどや顔を向
けた。」

「まあ、何!この汚らわしい猫は!?あっちへお行き!しっ!しっ
!。」

怪訝そうな顔を浮かべる女性に対しあかは何を思ったのかそのくら
いじゃあげられないわ。と解釈したらしく……。猫と人なので
勿論言葉は通じていません。

「ほう。俺の無防備な姿でも不足だと。欲張りな奴め……。いいだ

「茶子！どこ行ってたんだよ。今日はあにきと一緒に長谷川さんのところに行くっていったら」

怒る銀二を余所に大きな欠伸をする茶子は目の周りを前足でこしこしと擦りながら答える。

「うにゅ〜。陽に当たってたら眠くなっちゃって・・・てか、おやびんどうしたの？変な格好で・・・」

「ん？ああ、哀愁が漂ってて凄くすごかつこいいだろ・・・おいらもいつかあんな渋い漢になりたい」

「・・・そう？」

『どうせまた、醜い姿みせて逃げられたのを自分の良いように解釈してるんじゃないかな。まあ、そんなおやびんが・・・』

親分の横にそつと近寄る二人の子分。自分を見つめる視線に無言で立ち上がるあかは何か一つの決意めいた顔をしてふいに変貌する。

「ふつ。ふは！ふはは！！ふH A H A H A H A H A H A H！！！！」

「！！！！？？」

「長谷川宅はやめだ！！奴を追う！！俺から逃げれると思うなよ。既に俺の臭いは貴様の服にこびり付いているのだからなあ！！！！」

不適に歪んだ笑みを浮かべるあかに子分たちは互いに顔を見合わせ
て笑う。

「さっすがあにき！！痺れる憧れるうううう」

『やっぱりおやびんは馬鹿でおもしろい……』

あか・銀二・茶子は土煙を巻き上げながら風のように疾走し、瞬く間にその日保健所へと連行されていったらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4970k/>

野良猫三人今日も行く

2010年10月12日06時02分発行